

立命館大学の事例紹介 ～ +R for Future with Volunteer ～

山口洋典（立命館大学共通教育推進機構サービスラーニングセンター、災害復興支援室）

1. 原初の動き：現地への動きを「抑える」立場であった頃（～4/13）

- ・3月14日、東北地方太平洋沖地震による「緊急対策連絡調整会議」の設置
法人総務部を主管に、学生・生徒の安否確認や被災学生・入学生支援、義援金呼びかけ
- ・3月15日、「東北地方太平洋沖地震への災害救援活動を考えているみなさんへ」を発表
現地への駆けつけ、現地への問い合わせ・物資送付、勝手な募金活動を控えるよう促す
- ・3月18日、「立命館大学震災支援活動情報ネットワーク」（311+Rnet）の立ち上げ
開講まで(4/6)の時限組織で現地に行けない学生らの身の置き所に（部屋と電話を付与）
- ・4月8日、「東日本大震災関連特別検討プロジェクト」の設置が検討
副理事長を責任者に「学園」として中長期的な姿勢を協議、決定、全学の動きを統括。

2. 当初の動き：現地への動きを「妨げない」立場となった頃（4/14～）

- ・4月14日、311+Rnetとして「東日本大震災被災地でのボランティア活動について」を発表
相談窓口の提供、情報収集先の提示、組織的な活動への誘導、選択肢の提示、保険対応
- ・4月21日、「プロジェクト」により「立命館災害復興支援室」の設置
プロジェクトの責任者を室長に、復興・再建への支援活動の考え方等の整理・具体化
- ・4月25日、教務会議にて「学生のボランティア活動に対する教学的取り扱いについて」決定
「授業配慮は行わない」「積極的事由による休学の可能性を置く」「今後、科目設置」
- ・4月27日、311+Rnetの学生企画として「テレビではわからない被災地の現在と未来」開催
衣笠・BKC両キャンパス同時に同一テーマの別メニューで実施、Ustream中継・録画
- ・4月29日、東日本大震災に関する特設サイト「<http://www.ritsumei.ac.jp/rs/20110311/>」開設
「私たちにできること」と題して運用、また専用アドレスで学内外からの要望等を受付
- ・5月11日、常任理事会にて統一テーマ「fukko+R」に基づく多面的な活動方針を確認
災害復興支援基金の設置（年間60万円の給付）、復興支援研究推進（総額5000万円）など
- ・5月27日、災害復興支援室が「被災地の現状と私たちにできること～現地調査報告会」実施
BKCを主会場に衣笠・朱雀・APUの4会場を繋ぎ教職員・学生参加によるフォーラム開催

3. 具体的な動き：現地への動きを「促す」立場となった頃（6/24～）

- (1)協定を活かして、現地に駆けつける：日頃からの約束を今こそ形にと動いた
山形大学との包括協力協定（2008.6.19）をもとに「スマイルエンジン山形」に参加、など。
- (2)日頃の縁を結び直す：せっかくなので「何なりと連絡」をから
龍谷大学・深尾昌峰ゼミと山田町へバス共同運行、大阪ボランティア協会の支援で気仙沼へ
- (3)OBに呼びかける：地方入試以前と以後の世代が顕在化した
大船渡教育委員会と運動能力維持プログラム開発、ユースビジョンを通じいわてGINGA-NET
- (4)ネットワークに参加する：自らが組織化せずに遠慮がちに関わる
東北大学大学間連携災害ボランティアネットワーク、遠野市後方支援会議連携調整会議、等

4. 時間の経過に寄り添う支援を：「効率」と「秩序」が重視されてきた現場に対して...

- ・効率重視から効果の重視へ（作業を「こなす」→仕事を「担う」）...遠野への定期便の運行
- ・個人で背負い過ぎない（使命感の先行は当事者の役割を奪う）...パートナーシップの構築
- ・「次」の約束をする（各々のカレンダーに記入できる）...各々の現場の風景に思いを馳せる
- ・「したい」ことができ「できる」ことをする（「べき」論の呪縛を解く）...コ・プレゼンス

東日本大震災 被災地でのボランティア活動について

2011年4月14日

東日本大震災の被災地では、少しずつではありますがボランティアの受け入れ態勢ができはじめ、複数の学生のみなさんから、被災地でのボランティア活動についての相談が寄せられています。学生のみなさんが問題意識を持つことは大切なことですが、被災地でのボランティア活動に参加しようとする場合は、以下のような心構えや準備が必要であることを十分認識しておいてください。

1. 事前に大学窓口で相談する

被災地でのボランティア活動に参加しようとする場合は、事前に各キャンパスの学生オフィスまたはサービスラーニングセンター(=ボランティアセンター、以下同様)に相談してください。サービスラーニングセンターでは、震災ボランティアに参加する際の注意点などの情報提供や、ボランティア保険の加入手続きを行っています。

学生オフィス、サービスラーニングセンターを中心に構成する「立命館大学震災支援活動情報ネットワーク『311+Rnet』」では、震災ボランティアに関するリソースセンターとして、「被災地の方々を支援するボランティアをしたい」という学生のみなさんからの様々な相談を受け付けています。活動場所として衣笠サービスラーニングセンター(ボランティアセンター/学而館1階)横の学生ルームの一部を提供しています。

2. 事前に十分な情報を収集する

被災地でのボランティア活動は各府県の「災害ボランティアセンター」や「社会福祉協議会」がとりまどめを行っています。現在は「滞在中の食料や宿泊場所は自分で準備すること」が基本となっていますが、被災地の状況は刻一刻と変化します。被災地に迷惑をかけることなく、ニーズに即した活動を展開するために必要な情報を、事前に十分収集してください。

京都・滋賀地域では、被災地へのボランティア活動に関する情報を以下の拠点から得てください。

【京都】京都災害ボランティア支援センター

【滋賀】滋賀県社会福祉協議会

「311+Rnet」では、様々な情報を提供するとともに、皆さんからのご相談に応じています。ぜひ活用してください。

3. 被災地でボランティア活動をしようする場合は、決して個人で現地入りや活動をせず、現地の活動拠点を有する各団体を通じて参加する

被災地でのボランティアでは組織的な活動が必要です。個人で行動するとかえって被災者に迷惑をかけたり、自身の安全を確保することができない恐れがありますので注意してください。

4. 被災地を支援するボランティアには多様な方法があることを知る

被災地に直接行く以外に、関西でできる震災ボランティアがあります。「311+Rnet」では、そのようなボランティア活動に関する情報を紹介していく予定です。関心のある方は、各キャンパスのサービスラーニングセンターまで相談してください。

5. ボランティア保険に加入する

ボランティア活動に参加する際は、必ず事前に「ボランティア保険(天災に対応するもの)」に加入してください。各キャンパスのサービスラーニングセンターで保険加入手続きを行うことができます。活動に向かう3日前までに、サービスラーニングセンターで手続きを行ってください。

【京都】ボランティア保険(天災プラン)

【滋賀】ボランティア保険(天災タイプ)

<お願い>

「311+Rnet」では、今後、学生の皆さんから、震災関連ボランティアとして活動された体験・経験に関する情報を収集・蓄積し、それらの「情報を共有し交流する場」としての役割を果たしていきます。被災地での活動に限らず、震災復旧・復興支援に関わるボランティア活動の情報を積極的に寄せください。

東日本大震災関連のボランティア活動の教学上の取り扱いについて

2011年4月27日
立命館大学

東日本大震災の発生から約1ヶ月半が経過しました。基幹道路の復旧等にともない、未だ地域は限定的であるものの、公的機関またはNPO等による被災地域でのボランティア活動が活発になりつつあります。

本学学生の中にも、すでに被災地での活動に参加し、様々な形で被災者支援に貢献している方がおられます。

また、大学各所の窓口にも、被災地でのボランティア活動を希望する多くの学生から、様々な相談が寄せられるようになっていきます。

一方で、今次の大震災被害は、わが国の災害史上最大とされており、未だ続く余震や、地震で誘発された原子力発電所の事故への対処のために、被災地の復旧・復興および被災者支援の取り組みには、相当な年月と多種多様なアプローチを要することが予測されています。

そこで、みなさんの「少しでも被災者の役に立ちたい」という思いや、現地でのボランティア活動を通じて被災地に積極的な貢献を果たそうとする志は重く受け止めつつも、今次大震災の規模や被害の多様性、また長期化する支援活動の特性等の観点から、本学学生諸君のボランティア活動に関わる当面の教学上の取り扱いについては、以下の通りとします。

1. 震災関連ボランティアへの参加に関わる公欠・授業配慮について

これまで、学生が自主的に参加するボランティア活動は、課外活動に位置づけられており、それへの参加を理由とした公欠・授業配慮の対象とはしておりません。

今次の大震災関連のボランティアへの参加についても、他のボランティア活動と同様に公欠・授業配慮の対象にはなりません。

但し、今後本学が、公的機関や被災地域の大学等からの要請に基づき、組織的かつ主体的に実施する復興支援活動に学生諸君の協力を求める場合は、個別の判断をすることがあります。

2. 震災関連ボランティアへの参加を理由とする休学の申請について

今次の大震災に関わるボランティア活動に専念することを理由とする休学の申請があった場合は、これまでの他の様々な理由による休学申請と同様に扱い、所属学部において審議のうえ、その可否が決定されます。

なお、休学の申請に関わっては、概ね以下の内容が必要となります。

- ・活動の目的・内容が適切であること
- ・受入機関・団体の社会的信用（代表者氏名、現地での活動実績・拠点の有無等）が確認できること
- ・継続した一定の活動期間があること（授業期間・試験期間中の2ヶ月間以上）
- ・受入機関・団体が発行する「活動証明(書)」または「活動実態が確認できる客観的な資料」の提出が可能なこと
- ・申請書(理由書)および保証人同意書の提出があること

3. 学生の自主的なボランティア活動に対する単位授与について

今回の大震災関連のボランティア活動に限らず、これまでと同様に、学生の自主的な課外活動に対する単位授与は行いません。

なお、本学では、教育機関としての役割を果たす観点から、今後、様々な授業において震災復興支援に関わるテーマを積極的に盛り込むことや、関連する科目の開設を検討していきます。学生諸君においても、「今、大学で学ぶこと」の意義を再認識し、関連するテーマに関するより積極的な学習・研究を期待します。

今次の大災害が大規模・広域・複合型であることを鑑み、立命館大学の学生部とサービスマニージャネットワーク(311+rnet)を立ち上げました。阪神・淡路大震災活動情報ネットワーク「立命館大学ボランティア情報交流センター」の実践を参考にしつつ、部屋と専用電話を付与し、複数団体・個人のネットワーク組織として、卒業式や入学式での募金活動等を展開するなど、初動期から積極的な活動にあたりました。



Facebook等を用いて積極的に情報共有・交流を行い、現地に駆けつけることが困難な中でも可能な支援の有り様を探りました。



立命館大学ボランティアサークル1周に、活動拠点が設けられ、体験や関心を語り合いました。後にBKCにも活動が広がりました。



スポーツ健康科学部の学生有志15人は、栄養学の知識を生かし「O157結び(オムスビ)」をプロデュース、全額を義捐金としました。

立命館災害復興支援室では、立命館大学サービスマニージャセンターや学生オフィス等との連携により、学生による現地での支援活動や現地への後方支援活動を推進しています。

「災害サイクル」という考え方があります。災害が発生して間もない頃は「緊急・救命期」と呼ばれ、現場では専門家による人命救助が求められます。その後、遺体捜索が終わった頃には「復旧期」が訪れます。その段階に至ったとき、各地から駆けつけるボランティアたちの力が発揮されます。

立命館災害復興支援室では、地震発生直後から、現地に駆けつけたい学生たちの声に応えるべく、サービスマニージャセンターと学生部を中心に、その可能性を探ってきました。そして2008年に包括的協力協定を締結している山形大学との連携により、6月以降、ボランティアプログラムのリーダーと参加学生の募集を行いました。また、6月下旬には龍谷大学との協働により、京都災害ボランティア支援センターの協力のもと、岩手県の山田町にボランティアバスを共同運行をしました。それらの取り組みを踏まえて、夏期休暇中に参加型学習の一貫としてのボランティアバスプログラムの実施をいたしました。



災害復興支援室では、6月から9月にかけて、「復興+R基金」により、ボランティアバスを運行しました。のべ130名を越える立命館大学・APU学生が現地で活動しました。

▶ 広がる学びとつながりの輪…

立命館大学では4月14日「東日本大震災被災地でのボランティア活動について」を発表し、ボランティア活動への相談窓口の提供、情報収集先の提示、組織的な活動への関心の呼びかけ、活動先の選択肢の提示、学内窓口での保険対応について学生たちに情報提供を行いました。また、4月25日には「学生のボランティア活動に対する教学的取り組みについて」決定し、当面は震災ボランティア活動への授業配慮は行わないものの、積極的事由による休学の可能性を置くこと、また後期セメスター以降に東日本大震災へのボランティア活動を講義に組み込んだ科目を設置することを発表しました。また、立命館アジア太平洋大学でも、学生有志で結成された「APU-NEST」が該当募金等に取り組みしました。

▶ 形態の異なる3つのプログラムで

- 夏期休暇中のボランティアバスは、次の3つのプログラムを展開しました。
- ◎スマイルエンジン山形と連携したボランティアバスプログラムへの参加
8月19日から23日の5日間、山形大学の学生が中心に組み立てた、石巻市等での瓦礫撤去等の活動に学生25名が参加。最終日には東北芸術工科大学の学生たちとの公開シンポジウムも開催されました。
 - ◎大阪ボランティア協会と連携したサークル等の連合型による活動の展開
8月16日から23日の7日間、「気仙沼・暮らしたのしませ隊」と称し、「落語研究会」「出前ちんどん」「美術研究会」などの団体による、仮設住宅等での生活支援プログラムに学生26名が参加。その後、学園祭等を機にした交流も続いています。
 - ◎NPO法人ユースビジョン等による「いわて GINGA-NET」でのバス運行
全国約2000人が参加した、岩手県住田町を拠点にした夏の学生ボランティアプログラムに、9月7日～13日、9月14日～20日の2期にわたり、合計50名の学生が参加。釜石市、大船渡市、陸前高田市、大槌町での各種のボランティア活動に取り組みしました。



「ミナトEカオウヤ」被災地の障壁のある人々の収入を支える販路支援



「311+rnetカフエ」現地の被災情報や支援活動の展示やトーク企画の実施



「APU-NEST」の取り組み 国際学生が母国で世界に向けてメッセージ配信など